

Power とシステム正当化

—van der Toorn et al. (2015) の追試—

森永康子・東 智美・糸賀日奈子・曾我部里紗・上村冴子

A sense of power and system justification: Reexamining van der Troon et al. (2015)

Yasuko Morinaga, Tomomi Higashi, Hinako Itoga, Risa Sogabe, and Saeko Kamimura

We conducted two studies reexamining the findings of van der Toorn et al. (2015) that a sense of powerlessness fosters system justification (SJ). In Study 1, we used the Sense of Power Scale (Anderson et al., 2012) and found that a sense of powerfulness as well as a sense of powerlessness are positively associated with SJ. In Study 2, after priming participants with a feeling of powerfulness vs. powerlessness, we investigated the mediating effects of emotions on the relationship between sense of power and SJ. Although participants experienced positive emotions in the Powerful condition and negative emotions in the Powerless condition, we did not find any significant effects of emotions on SJ. Further studies are needed to investigate the relationship between a sense of power and SJ using more sophisticated methods.

キーワード : a sense of power, system justification, emotions

問 題

システム正当化理論 (system justification theory; Jost & Banaji, 1994) は、なぜ社会に格差が残り続けるのかを説明する理論の一つである。この理論では、人々が現状維持を求める動機をもち、そのために現状の社会を良いものであり正統なものだとみなす傾向があると主張する。さらに、この理論では社会経済的地位が低い人の方が高い人よりもシステム正当化しやすいと予測する (a strong form of system justification theory; Jost, 2011)。実際に、米国において低収入の方が高収入よりも現状を正統なものとし、格差があった方が動機づけが高まり努力をするようになると回答したり (Jost, Pelham, Sheldon, & Sullivan, 2003)、発展途上国の低地位の子どもたちが高地位の子どもたちよりも、社会的不平等を生み出していると考えられる政府のことをうまく機能していると答えたりする (Henry & Saul, 2006) 傾向が報告されている。

なぜ人々は格差がある社会を肯定するのであろうか。これは、現状肯定することで、問題ある社会に生きているあるいは低地位者であるという認識から生じるネガティブな感情を減じ、心理的安寧を得ることができるためと考えられている (e.g., Jost & Hunyady, 2002; Jost & Thompson, 2000)。

これはシステム正当化の緩和機能と呼ばれるものである (see Jost, 2019 for review)。例えば, Napier and Jost (2008) は, システム正当化信念の一つと考えられる能力主義 (meritocracy) を支持するほど, 主観的幸福感が高いことを見出している。また, Vargas-Salfate ら (2018) は縦断的調査を行い, タイム1で測定したシステム正当化がタイム2の人生満足度と正の関連を示すことを見出している。

しかしながら, システム正当化理論の中で, 低地位の方が高地位者よりもシステム正当化傾向が高いという主張については, 支持しない結果も報告されている。例えば, Brandt (2013) は異なる学歴や収入などの社会的地位の高低によってシステム正当化の程度が異なること, また, Caricati (2017) は高地位の方が低地位者よりもシステム正当化の程度が高いことを見出している。

こうした一貫しない結果に対して, van der Toorn et al. (2015) は, 客観的な社会的地位ではなく, 主観的な power 感 (a sense of power) の程度が影響しているのではないかと主張し, 5つの研究から power 感の低い者 (the powerless; 低 power 者) が power 感の高い者 (高 power 者) よりもシステム正当化を強く行うことを見出した。ここでの power とは, 社会的関係において価値ある資源に対する非対称なコントロールと定義される (van der Toorn et al., 2015, p94)。高 power 者は自分たちの地位を維持できるようなやり方をとる, つまり, 資源に対する自分たちのコントロールを維持したり増加したりするように, 情報を処理し, 目標に近づき, 決定を下すのである。これに対して, 低 power 者は自分たちの状況を改善するために使える手段が限られており, 他者に強く依存する必要がある (以上は, van der Toorn et al., 2015 に基づく)。

本研究は, van der Toorn et al. (2015) が明らかにした power 感とシステム正当化の関連について, 研究1では power 感尺度 (Anderson, John, & Keltner, 2012) を用い, 研究2では実験的に power 感を操作することで追試を行う。また, 研究1では, システム正当化と人生満足度が関連するというシステム正当化理論の主張 (e.g., Jost & Hunyady, 2002; Jost & Thompson, 2000) についても検討する。

さらに, van der Toorn et al. (2015) は power 感とシステム正当化の関連について, その間を感情が媒介しているのではないかと推測している (p. 107)。低 power 者は他者に依存することで資源に接近するしかないため, 他者に依存せずに資源を得ている高 power 者と自分を比較することでネガティブな感情が喚起されるが, システムを正当化することでネガティブ感情が低減するのだろう (システム正当化の緩和機能) という。そこで, 研究2では感情の媒介効果についても検討を行う。

研究 1

研究1では, power 感の高低によってシステム正当化の程度が異なるのかについて, power 感尺度 (Anderson et al., 2012) を用いて検討する。van der Toorn (2015) に基づくならば, power 感が低い人ほどシステム正当化が強いことが予測できる。さらに, システム正当化の緩和機能から, 低 power 者もシステム正当化することで人生満足度が高くなることが予測できる。このシステム正当化の媒介効果についても合わせて検討を行った。

方 法

参加者 質問紙を配布した 99 名のうち, 回答に大きな不備のあった者と海外経験が 10 年以上の

者¹を除いた 91 名（男性 67 名，女性 23 名，答えたくない 1 名）を分析対象とした ($M_{age} = 18.8, SD_{age} = 1.17$)。教養科目の心理学概論の授業の一環として質問紙調査を行ない，調査終了後に研究内容のデブリーフィングとともに心理学の研究方法についての説明を行った。

質問紙の構成と質問項目 質問紙調査は「大学生の生活態度」という名目で実施した。質問紙の構成は，人生満足度尺度 (Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985; 大石, 2009; 5 項目; 項目例「ほとんどの面で，私の人生は私の理想に近い」「私は自分の人生に満足している」; 6 件法 1 = まったく当てはまらない，6 = 非常に当てはまる)，フィラー項目 (7 項目; 項目例「毎朝，朝食を食べる」「休日は夜更かしをする」)，システム正当化尺度 (Kay & Jost, 2003; 8 項目; 項目例「総じて言えば，社会は公平である」「総じて言えば，日本の政治制度は機能している」; 6 件法 1 = まったく同意しない，6 = 非常に同意する)，フィラー項目 (8 項目; 項目例「テレビを見るよりネットをしている時間の方が長い」「ボランティア活動に興味がある」)，power 感尺度 (Anderson et al., 2012; 8 項目) の順番であった。

power 感尺度は「他の人 (友人，家族，サークルの知人，バイト仲間など) との関係で，以下のようなことはどのくらい当てはまりますか」という教示のもと，「私は他の人に自分の言うことを聞かせることができる」「私の望みはあまり察してもらえない (逆転項目)」「私は他の人を自分の思い通りにさせることができる」「私が意見を述べてもほとんど重要視されない (逆転項目)」「私は他の人に対して大きな影響力を持っていると思う」「私の考えや意見は無視されることが多い (逆転項目)」「私は何かしようとしても思い通りにできない (逆転項目)」「私は自分が望めば，決定を下すことができる」の 8 項目に 6 件法 (1 = まったく当てはまらない，6 = 非常に当てはまる) で回答を求めた。

結果²

人生満足度尺度 ($\alpha = .838; M = 3.415, SD = 0.853$)，システム正当化尺度 ($\alpha = .596; M = 3.504, SD = 0.504$)，power 感尺度 ($\alpha = .786; M = 3.530, SD = 0.569$) は，それぞれの尺度を構成する項目の平均値を算出し，各尺度得点とした。いずれも得点が高いほど，人生満足度が高く，システム正当化が強く，power 感が高いことを意味する。power 感尺度得点とシステム正当化尺度得点には有意な相

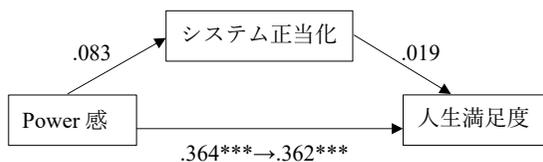


Figure 1 媒介分析の結果 (研究 1)

数値は標準化係数 (β)。いずれの変数も得点が高い方が当てはまる程度が高い。

*** $p < .001$

¹ 長期の海外経験が power 感に影響をもたらすことが予測されたため分析から除外した。

² 本研究の分析は HAD16.202 (清水, 2016) および R 3.6.2 を用いた。

関が見られず ($r = .083, p = .436$), 低 power 者つまり powerlessness が強い者ほどシステム正当化が強いという仮説は支持されなかった。また, 人生満足度とシステム正当化にも有意な相関が見られず ($r = .049, p = .645$), システム正当化が強い者ほど人生満足度が高いという関係も見られなかった。さらに, システム正当化の媒介効果を検討するために, bootstrap 法 (resampling = 2,000) による検定を行ったが, 有意な効果は見出されなかった ($B = .002, SE = .024, Z = .098, p = .992$; Figure 1)。Power 感は直接的に人生満足度に関連し, power 感が高い者ほど人生満足度が高かった。

ところで, 本研究における power 感尺度は順項目と逆転項目からなっており, 順項目に「当てはまる」と回答すると power 感が高く, 逆転項目に「当てはまる」と回答すると power 感が低いつまり powerless であることを意味する。power 感尺度に対して, 順項目と逆転項目という 2 因子を想定して, 確認的因子分析を行ったところ, 比較的良好な適合度が得られた ($CFI = .942, RMSEA = .095, GFI = .915$)。そこで, 順項目 ($\alpha = .810$) と逆転項目 ($\alpha = .822$) のそれぞれで平均値を算出し, Powerfulness 得点 ($M = 3.179, SD = 0.786$) と Powerlessness 得点 ($M = 3.239, SD = 0.650$) とした (両得点の相関係数 $r = -.250, p = .017$)。この得点を用いて再度仮説を検討した結果, Powerfulness 得点が高い場合にも Powerlessness 得点が高い場合にも, システム正当化が強くなる傾向が見られた (Figure 2)。

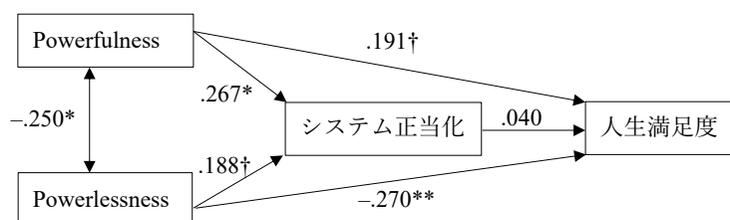


Figure 2 共分散構造分析の結果 (研究 1)

数値は標準化係数 (β)。CFI = 1.000, RMSEA = .000, GFI = 1.000。いずれの変数も得点が高い方が当てはまる程度が高い。

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

考 察

研究 1 では, van der Toorn et al. (2015) の追試を行い, power 感が低い人の方が高い人よりもシステム正当化を行うのかについて検討したが, 仮説は支持されず, power 感はシステム正当化とは関係しなかった。また, システム正当化することで幸福感が得られるというシステム正当化理論の主張 (e.g., Jost & Hunyady, 2002; Jost & Thompson, 2000) も支持されなかった。しかしながら, power 感を powerfulness と powerlessness に分けた場合, いずれもシステム正当化と正の関連を示し, power 感が低くても高くてもシステム正当化を強めていることが示唆された。このことから powerfulness と powerlessness がシステム正当化と関連するプロセスがお互いに異なっていることがうかがえる。van der Toorn et al. (2015) は, powerlessness によってシステム正当化が強くなることについて, そ

の間をネガティブ感情が媒介しているのではないかと推測している。つまり、低 power 者 (the powerless) は他者に依存しなければいけないため、そのことによってネガティブ感情が喚起されるが、システム正当化によりネガティブ感情を低減できると考えられる。この主張から、powerfulness と powerlessness がともにシステム正当化を高める働きをもっている、powerlessness の場合はネガティブ感情が、powerfulness の場合にはポジティブ感情が媒介することが予測できよう。そこで、研究 2 では power 感を操作し、powerful 感あるいは powerless 感を喚起させた上で、感情の媒介効果を検討することにした。

研究 2

方法

参加者 大学生 62 名を対象に質問紙を配布したが、未回答者や海外での生活が長かった者、質問紙への回答を順番通りに行わなかったと報告した者を除いた 53 名を分析対象とした (Powerful 条件 26 名、Powerless 条件 27 名、 $Mage = 19.6$, $SD\ age = 0.85$)。大学の社会心理学の講義中に、授業の一環として質問紙を用いて実験を行い、回答終了後、授業担当者から研究の目的や結果の予測などのデブリーフィングを行なった。さらに、社会心理学の実験方法に関する講義を行った。

手続き 「大学生の思い出に関する調査」という名目で質問紙を配布し、まず、power 感の操作を行った。Powerful 条件では参加者が他者に対して power (影響力) を行使した出来事、Powerless 条件では他者が参加者に対して power を行使した出来事を想起させるため、次のような質問への回答を自由記述で求めた。Powerful 条件では、「あなたが他者に対して power (影響力) を行使していた場面を思い出してください。本調査における「power (影響力) を行使する」とは、あなたが他者に指示・助言・忠告などをして他者の成果や行動を左右したり、他者に影響を及ぼしたりすることができる、あるいは他者を評価する立場にあることを指します」と教示したのち、「いつ頃」「その時点であなたの立場・役割」「誰に対して」「あなたがどのような行動をとったか」「あなたの行動が他者にどのような影響を与えたか」「あなたがそのときどう感じたか」の 6 つの質問に対して回答を求めた。Powerless 条件では、Powerful 条件の「あなた」と「他者」を入れ替えた教示を行った後に、同様の質問に回答を求めた。

power 感の操作ののちに、ポジティブ感情とネガティブ感情 (Diener et al., 2010; 中里, 2017; 12 項目; 例「気分の良い」「心配した」「幸せな」「怒った」) を尋ね、研究 1 と同様のシステム正当化尺度 (8 項目; $\alpha = .572$) への回答を求めた。また、操作チェックのために「やる気がある」「無気力な」の 2 項目も感情語の中に入れた。

結果

まず、power 感操作の効果を確認するために、本研究の著者以外の 3 名の大学生に、参加者の記述内容を評定させた。評定に際しては、power の定義を説明したあと、参加者の記述を活字にしたものを提示し、van der Toorn et al. (2015) を参考に作成した「回答者が power (影響力) をどのくらい持っていたと思いますか (powerfulness 項目: 評定者間信頼性 $ICC = 0.170$)」「回答者が他者にどのくらい左右されていたように思いますか (powerlessness 項目: $ICC = 0.433$)」の 2 項目で評定を

求めた (0 = 0% から 10 = 100% の 11 件法)。評点者間信頼性が低かったが、3 名の評定者の平均値を算出したところ、Powerful 条件は Powerless 条件よりも power 感を高く持っていると認知され (powerfulness 項目: Powerful 条件 $M = 5.974$, $SD = 0.788$; Powerless 条件 $M = 3.037$, $SD = 1.083$; $t(47.514) = 11.316$, $p < .001$, $d = 3.045$)、Powerless 条件は Powerful 条件よりも他者からの影響を高く受けていると認知されていた (powerlessness 項目: Powerful 条件 $M = 5.641$, $SD = 1.941$; Powerless 条件 $M = 7.210$, $SD = 1.771$; $t(50.158) = 3.070$, $p = .003$, $d = 0.833$)。また、操作チェックのために感情語の中に入れた「やる気がある」では、Powerful 条件の方が Powerless 条件よりも得点が高く (Powerful 条件 $M = 4.269$, $SD = 1.251$; Powerless 条件 $M = 3.444$, $SD = 1.601$; $t(48.950) = 2.094$, $p = .041$, $d = 0.564$)、「無気力な」では、Powerless 条件の方が Powerful 条件よりも得点が高い傾向が見られた (Powerful 条件 $M = 2.077$, $SD = 1.017$; Powerless 条件 $M = 2.704$, $SD = 1.463$; $t(46.470) = 1.817$, $p = .076$, $d = 0.489$)。以上のことから、power 感操作は有効であったと言える。

次に、感情項目のポジティブ感情とネガティブ感情の 2 側面について、確認的因子分析を行ったところ適合度は低かった (CFI = .857, RMSEA = .171, GFI = .751) が、信頼性係数が高かった (ポジティブ感情 $\alpha = .947$; ネガティブ感情 $\alpha = .833$) ため、それぞれの平均値を算出し感情得点とした。Powerful 条件と Powerless 条件のシステム正当化得点と感情得点を Table 1 に示した。ポジティブ感情は Powerful 条件で Powerless 条件より高く、ネガティブ感情は Powerless 条件で Powerful 条件より高かったが、システム正当化には有意な差が見られなかった。次に、power 感が高いつまり powerfulness の場合にはポジティブ感情が、power 感が低いつまり powerlessness の場合にはネガテ

Table 1 各変数の平均値および標準偏差 (研究 2)

	Powerful条件	Powerless条件	<i>t</i>	<i>df</i>	<i>p</i>	<i>d</i>
システム正当化	3.418 (0.509)	3.468 (0.479)	0.363	50.504	.718	0.098
ポジティブ感情	3.667 (1.167)	2.673 (1.162)	3.106	50.905	.003	0.841
ネガティブ感情	2.564 (1.103)	3.142 (0.969)	2.023	49.628	.048	0.549

いずれも 6 件法。得点が高い方が当てはまる程度が高い。

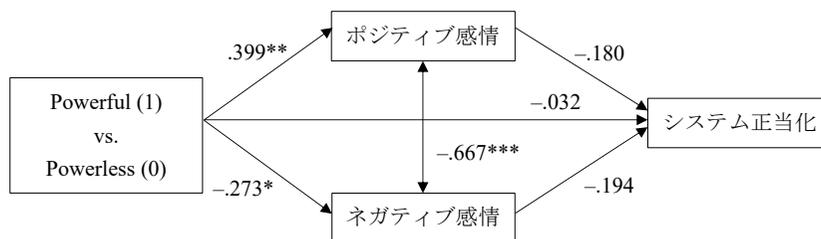


Figure 3 共分散構造分析の結果 (研究 2)

数値は標準化係数 (β)。CFI = 1.000, RMSEA = .000, GFI = 1.000。いずれの変数も得点が高い方が当てはまる程度が高い。

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

イブ感情が媒介してシステム正当化が生じるという仮説を検討するために、Figure 3 のようなモデルを作成し共分散構造分析を行った。その結果、power 感の操作によって感情が喚起していることは示されたが、システム正当化との関連は見られなかった。

考 察

研究 2 では、power 感を操作し、power 感とシステム正当化が関連するか、また、感情の媒介効果が見られるかについて検討した。しかしながら、Powerful 条件ではポジティブ感情、Powerless 条件ではネガティブ感情が喚起されていたが、こうした感情とシステム正当化との関連は見出せなかった。つまり、van der Toorn et al. (2015) が推測したような powerlessness がネガティブ感情を媒介してシステム正当化につながるという仮説は支持されなかったと言えよう。power 感とシステム正当化を媒介するのは、システム正当化の緩和機能を引き起こすような要因、例えば、自尊心や自己評価といったものなのかもしれない。しかしながら、研究 2 では統制条件を設けていなかったために、Powerful 条件と Powerless 条件を比較せざるを得なかった。今後は統制条件を設けて、power 感が中程度の場合と Powerful 条件や Powerless 条件とを比較して検討する必要がある。

総 合 考 察

本研究は、van der Toorn et al. (2015) が示した power 感とシステム正当化の関連について追試を行うことであった。彼女らは、power 感が低いこと (powerlessness) によってシステム正当化が強くなることを示したが、本研究では power 感 (Anderson et al., 2012) を 1 次元で捉えた場合には、システム正当化との関係は見られなかった。しかし、研究 1 で power 感を powerfulness と powerlessness を分けた場合には、双方とも得点が高いほどシステム正当化が強くなるという結果が得られた。このように、研究 1 の結果は van der Toorn et al. (2015) とは異なる様相を示すものであった。研究 2 では、統制条件を設けていなかったために明確な結果は得られなかったが、powerfulness と powerlessness では異なる感情が喚起されており、この両者がともにシステム正当化を高めるならば、そのプロセスは異なっているのではないかと推測できる。今後も、powerlessness と powerfulness がシステム正当化にどのように関連するのかについて、研究方法を吟味した上で検討する必要がある。

引用文献

- Anderson, C., John, O. P., & Keltner, D. (2012). The personal sense of power. *Journal of Personality*, 80, 313-344.
- Brandt, M. J. (2013). Do the disadvantaged legitimize the social system? A large-scale test of the status-legitimacy hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 104, 765-785.
- Caricati, L. (2017). Testing the status-legitimacy hypothesis: A multilevel modeling approach to the perception of legitimacy in income distribution in 36 nations. *The Journal of Social Psychology*, 157, 532-540.
- Diener, E., Larsen, R. J., Levine, S., & Emmons, R. A. (1985). Intensity and frequency: Dimensions underlying positive and negative affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 1253-1265.

- Diener, E., Wirtz, D., Tov, W., Kim-Prieto, C., Choi, D. W., Oishi, S., & Biswas-Diener, R. (2010). New well-being measures: Short scales to assess flourishing and positive and negative feelings. *Social Indicators Research*, *97*, 143-156.
- Diener, E. D., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The Satisfaction with Life Scale. *Journal of Personality Assessment*, *49*, 71-75.
- Henry, P. J., & Saul, A. (2006). The development of system justification in the developing world. *Social Justice Research*, *19*, 365-378.
- Jost, J. T. (2011). System justification theory as compliment, complement, and corrective to theories of social identification and social dominance. In D. Dunning (Ed.), *Social motivation* (p. 223–263). New York, NY: Psychology Press.
- Jost, J. T. (2019). A quarter century of system justification theory: Questions, answers, criticisms, and societal applications. *British Journal of Social Psychology*, *58*, 263-314.
- Jost, J. T., & Banaji, M. R. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, *33*, 1-27.
- Jost, J., & Hunyady, O. (2003). The psychology of system justification and the palliative function of ideology. *European Review of Social Psychology*, *13*, 111-153.
- Jost, J. T., Pelham, B. W., Sheldon, O., & Sullivan, B. N. (2003). Social inequality and the reduction of ideological dissonance on behalf of the system: Evidence of enhanced system justification among the disadvantaged. *European Journal of Social Psychology*, *33*, 13-36.
- Jost, J. T., & Thompson, E. P. (2000). Group-based dominance and opposition to equality as independent predictors of self-esteem, ethnocentrism, and social policy attitudes among African Americans and European Americans. *Journal of Experimental Social Psychology*, *36*, 209-232.
- Kay, A. C., & Jost, J. T. (2003). Complementary justice: Effects of “poor but happy” and “poor but honest” stereotype exemplars on system justification and implicit activation of the justice motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, *85*, 823-837.
- 中里直樹 (2017). 日本人の Well-being の低さに関する要員の検討：自由選択の感覚を低める日本の社会環境 平成 28 年度広島大学大学院教育学研究科博士論文（未公開）
- Napier, J. L., & Jost, J. T. (2008). Why are conservatives happier than liberals? *Psychological Science*, *19*, 565-572.
- 大石繁宏 (2009). 幸せを科学する：心理学からわかったこと 新曜社
- 清水裕士 (2016). フリーの統計ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 *メディア・情報・コミュニケーション研究*, *1*, 59-73.
- van der Toorn, J., Feinberg, M., Jost, J. T., Kay, A. C., Tyler, T. R., Willer, R., & Wilmoth, C. (2015). A sense of powerlessness fosters system justification: Implications for the legitimation of authority, hierarchy, and government. *Political Psychology*, *36*, 93-110.
- Vargas-Salfate, S., Paez, D., Khan, S. S., Liu, J. H., & Gil de Zúñiga, H. (2018). System justification

enhances well-being: A longitudinal analysis of the palliative function of system justification in 18 countries. *British Journal of Social Psychology*, 57, 567-590.

附記

本論文は、2019 年度に広島大学教育学部で開講された心理学課題演習において、第 1 著者の指導により第 2 著者から第 5 著者が実施した研究をもとに執筆したものである。研究の一部は第 2 著者から第 5 著者により中国四国心理学会第 75 回大会学部生研究発表会において報告された。また、本研究は JSPS 科研費 JP18K03007 の助成を受けた。